

惜しくもオンライン開催… ～ ACA2022参加報告

The event was regrettably held online only ... ACA2022 participation report

浅野 晃
Akira Asano関西大学総合情報学部
Faculty of Informatics, Kansai University

第7回アジア色彩学会 (ACA2022) が、2022年10月20、21日に開催されました。当初は、台北での対面会議とオンライン会議とのハイブリッド方式による開催と案内されていましたが、投稿募集期間中に「オンラインのみによる開催に変更」と告知されました。今回は、オンライン会議システムによる講演の他、ポスターをウェブサイトに掲示し、発表者が事前に録画した動画でショート講演を行う「バーチャルポスターセッション」も行われました。論文集やポスターはオープンアクセスとなっており、現在(2023年5月)もACA2022ウェブサイトで見ることが出来ます。
<https://www.aca2022.taipei/>

台湾では、長らく入境者数が制限されて隔離が義務付けられていたので、オンラインのみによる開催となったのは、制限緩和が開催日に間に合わないと判断されたからだと思われれます。ただ、結果的には、10月13日から隔離が廃止されて入境者数の上限が大幅に引き上げられたので、実に惜しいタイミングでした。私も、台湾出張を楽しみにして、出張旅費のための予算も確保していたのですが、残念ながら出張は叶いませんでした。

さて、本来は出張を予定していたわけですから、その予定にあわせて担当講義を休講にして、終日オンライン研究集会に参加してもよかったのですが、自分が大学にいるのに休講にするのは気が引けます。そうやって大学にいと、いろいろ用事も入ってくるので、聴講もなかなかできず、結局自分が発表したセッション以外はほとんど参加できませんでした。コロナ禍の中、オンライン会議は急速に広まりましたが、実際に会場に行って会議に参加するというのは、「他の用事を遮断する」という意味合いもあると感じます。

自分の発表の時間は、自分の講義のすぐ後にあたっていたので、講義を少し早めに切り上げて、発表の用意をしておいた部屋に移動しました。私は、教室での講義と並行して、オンデマンド受講のための動画も別途制作しているので、切り上げた分は「あとで動画を見てください」とすることができて、こういうときには便利です。

自分の発表は「赤・紅や青・藍という漢字から想起される色に、日本と中国の違いがあるか」というものでした。漢字に関する内容なので、台湾開催のACAで発表するのを楽しみにしていました。会場の雰囲気を感じることができなかったのは残念でしたが、「同じ漢字から想起される彩度に日中で違いがあったということだが、色相についてはどうだったのか?」といった質問もあって、関心をもたれたのはよかったです。

図1は、発表前に準備した「コックピット」です。写真のようにタイマーを用意して発表にのぞみましたが、緊張していたのか、話し始めるときにタイマーのスタートボタンを押すのを忘れてしまいました。オンライン発表には、会場での登壇発表とはまた別の緊張感があります。

同じセッション (color & culture) では、食品と色彩に関する発表がタイとインドネシアの研究グループからありました。前者はミルクティーの色と期待される味の関係、後者は、茶葉の精製の過程や程度と観察される色との関係についてのものでした。ACAでは、以前から食品の色彩に関する発表が多く、アジアでの関心の高さをうかがわせます。

2023年は、AIC Congressがチェンライ(タイ)で開かれるので、ACAはお休みで、次のACAの開催は2024年以降となります。みなさん、チェンライで(今度こそオンサイトで)お目にかかりましょう。



図1. 発表のための「コックピット」.